

福沢諭吉 (ふくざわ・ゆきち) 1835~1901

啓蒙思想家・教育家 ~近代日本の精神的指導者~

出生 天保5年12月12日(1835)大阪玉江橋北詰中津藩蔵屋敷に中津藩士である父百助の第5子として生まれる。翌年、父が病死し、母子6人で中津(大分県)に帰る。

履歴 蘭学を志して長崎に出て学んだ後(1854)大阪の緒方洪庵の適塾に入門する(1855)。藩命により江戸に出て築地鉄砲洲の奥平家中屋敷に蘭学の私塾(慶応義塾の起源)を開く(1858)。軍艦咸臨丸に乗り込み渡米し、帰国後、処女著作『増訂華英通話』を刊行する(1860)。その後も、渡欧、再渡米し見聞を広める。塾を芝新銭座に移し、時の年号に因んで慶応義塾と名づけ(1868)。授業料の制度を初めて起こす。1869年から出版業の自営に取りかかり、『民間雑誌』(1874)、『家庭叢談』(1876)、『時事新報』(1882)をそれぞれ創刊するほか、交詢社を発会する(1880)そのほか、芝区から東京府議員に選出され(1878)東京学士会院の創設にあたっては初代会長に就任している(1879)さらに北里柴三郎のために伝染病研究所の創立にも尽力した(1892)



事績 福沢諭吉の生きた時代は明治維新前後にあたり、封建社会から近代日本の形成期にあつて、思想的啓蒙と教育の実践的な活動家として先導的な役割を果たした。思想的には多くの著述や新聞論説、演説等の活動を通して、日本の近代化には、個人及び国家の自由と独立、そのための独立の気力と国民の文明が必要であると説いた。またそのような人材の育成が重要であるとして慶應義塾を興した。多くの門下生を輩出し、文化、実業、教育など幅広い分野で先駆的な業績を残したことも併せ、日本における西洋的な近代社会の礎を築いた指導者の一人である。

評価 封建社会から近代日本への道筋を示した啓蒙家、教育の実践家として定評を得ている。しかし、当時から実利的な個人主義者と見る批判もあった。また「西洋文明」に触発されて形成された思想であり、「アジア」への考察が不足しているとの批判もある。『帝室論』や『尊王論』をめくっては当ても賛否が分かれたと伝えられている。戦後も民主主義の中でもてはやされたり、福沢の「脱亜論」が厳しい批判的となることもあった。しかし歴史の節目節目で福沢が再考察されている点からも、今なおその先見性は多くの論者が認めるところである。

代表作

『学問のすゝめ』 1872年から1876年までに発表した17編の小冊子。読物として努めて読みやすく書かれ、当時の大ベストセラーとなり1880年には70万部に及んだと伝えられる。福沢が初めて新しい時代の方向を示す思想を展開し、人間平等、実学の重要性、国家の独立、新しい社会の建設を説いている。著作集第3巻に収録。

『文明論之概略』 「文明論とは人の精神発達の見論なり」と書き出された本書は、福沢の著作の中でも最も学術的な内容であり、文明史一般を論じ、福沢の文明史観が展開されている。第4巻収録。

『福翁自伝』 小泉信三によって自伝文学の白眉と評価されている。公開を目的に口述されており、アウグスティヌスの「告白」、ゲーテの「詩と真実」、ルソーの「告白」などと並び称される。第12巻収録。

キーワード

天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず 『学問のすゝめ』の初編冒頭のこの言葉は多くの人に知られている。この本の中で近代社会では人間はみな平等であり、身分ではなく業績が重視されると説いている。また、個人が自由独立して初めて一国が独立できるとともに、一国の独立が個人の独立を促すとしている。実学 近代社会における学問は、経済、法律、学術など「人間普通日用に近き学」である「実学」を修めることが重要であると提唱した。 独立自尊 慶応義塾「修身要領」(1900年)の基本理念で、独立自尊の人とは「心身の独立を全うし自から其身を尊重して人たるの品位を辱めざるもの」とする福沢晩年の思想である。

Eピソード 福澤は幼少のときから酒が好きで、「物の工夫をするようなことをする」のが得意であった。また、『福翁自伝』に「私は自身の既往を顧みれば遺憾なきのみが愉快なことばかりである」と記しているように、明るく肯定的な性格と推測される。なお、福澤は華やかな脚光を浴びる人ではなかったが、死去に際して、衆議院で哀悼の決議案が可決され、会葬には1万5千人が参列したとされている。

最期 1901年(明治34)1月25日脳溢血が再発し、2月3日三田慶應義塾内の自宅で死去。享年66歳。

Great Works 01

福澤諭吉著作集 全 12 巻 慶應義塾大学出版会 2002～2003 年 <081.6 / 148 >

解題 福澤諭吉没後 100 年にあたり、代表著作を精選した新編集の著作集として刊行された。現代の読者のために読みやすい本文を提供することを目指し、一部の固有名詞を除き常用漢字や現代かな遣いに改めている。収録されている著作の多くは、底本として福澤諭吉生前の最終版本である『福澤全集』(時事新報社 1898)を使用し、個別著作の初版及び各版本や掲載誌、自筆草稿等を参考に本文を作成している。なお、各巻の巻頭に口絵、巻末に解説及び事項索引、固有名詞索引等を付している。

内容

- 第 1 巻 西洋事情 初編(抄)[1866 年]西洋事情 外編[1868 年]西洋事情 二編(抄)[1870 年]
第 2 巻 訓蒙窮理図解[1868 年]世界国尽[1869 年]童蒙教草(抄)[1872 年]文字之教[1873 年]
第 3 巻 学問のすゝめ[1872～1876 年 全 17 編]学問のすゝめ 初編(初版本・影印)
第 4 巻 文明論之概略[1875 年]
第 5 巻 学問之独立[1882 年]【論文】慶應義塾之記[1868 年]中元祝酒之記[1868 年]他
第 6 巻 民情一新[1879 年]民間経済録[1877 年]民間経済録 二編[1880 年]通貨論[1878 年]実業論 [博文館 1893 年]【論文】通貨論(時事新報)[1882 年]尚商立国論[1890 年]
第 7 巻 分権論[1877 年]通俗民権論[慶應義塾出版社 1878 年]通俗国権論[慶應義塾出版社 1878 年] 通俗国権論 二編[慶應義塾出版社 1879 年]国会論[1879 年]国会難局の由来[1892 年]他
第 8 巻 時事小言[1881 年]【論文】朝鮮の交際を論ず[1882 年]脱亜論[1885 年]他時事新報社説
第 9 巻 明治十年丁丑公論・瘠我慢の説[時事新報社 1901 年]帝室論[1882 年]尊王論[1888 年]【論文】 旧藩情[1901 年]華族と貴族[小論の収録]
第 10 巻 日本婦人論[1885 年]日本婦人論 後編[1885 年]男女交際論[1886 年]男女交際余論[1886 年]日本男子論[1888 年]福澤先生浮世談話[時事新報社 1898 年]女大学評論・新女大学[1889 年] 【論文】中津留別の家[1870 年]婦人肥満之説[『福澤文集 二編』巻一収録 1879 年]
第 11 巻 福翁百話[時事新報社 1897 年]福翁百余話[時事新報社 1897 年]
第 12 巻 福翁自伝[時事新報社 1898 年]福澤全集緒言[時事新報社 1897 年]

明治初期の頃は出版の制度や慣行が現在とは異なっているため、出版者が不明瞭な場合には出版者を明示していない。

参考文献 ～この人をもっと知るために～

< 図書 >

- ☞ 福澤諭吉の哲学(岩波文庫)/丸山眞男著 松沢弘陽編
岩波書店 2001 年 335 p <イ311/マ> 資料番号 21397682
- ☞ 福澤諭吉 文明と社会構想(現代自由学芸叢書)/中村敏子著
創文社 2000 年 189,11 p <289.1KK/4031> 資料番号 21341284
- ☞ 福澤諭吉論の百年(Keio UP 選書)/西川俊作・松崎欣一編
慶應義塾大学出版会 1999 年 320 p <289.1HH/3765> 資料番号 21172556
- ☞ 福澤諭吉 その重層的人間観と人間愛(丸善ライブラリー)/桑原三郎著
丸善 1992 年 225 p <289.1AA/3075> 資料番号 20475752
- ☞ 「文明論之概略」を読む 上・中・下(岩波新書)/丸山眞男著
岩波書店 1986 年 3 冊 <304T/308> 資料番号 12388526, 12388534, 12388542
- ☞ 福澤諭吉展 生誕 150 年記念 黒船来航から独立自尊まで/福澤諭吉展委員会編集
慶應義塾 1984 年 109 p <289.1/3658> 資料番号 21042171
- ☞ 福澤諭吉とその門下書誌(慶應義塾関係者文献シリ-ズ 第 1 集)/丸山信編
慶応通信 1970 年 247 p <370.3/26> 資料番号 11074234
- ☞ 資料集成明治人の見た福澤諭吉/伊藤正雄編
慶応通信 1970 年 243 p <289.1/809> 資料番号 10527836
- ☞ 福澤諭吉(岩波新書)/小泉信三著
岩波書店 1966 年 209 p <289.1/900> 資料番号 10528883